弘学時報

第 36 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

子どもたちの体力に一考

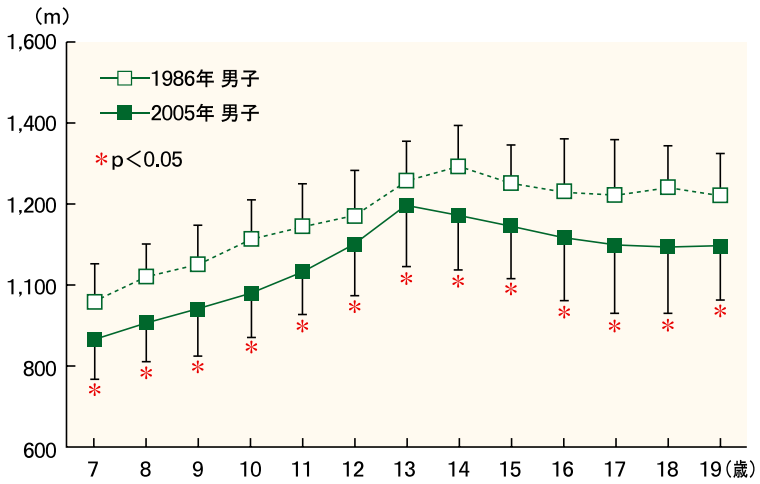
学長　吉岡　利忠

「最近の子どもたちは、身長や体重に見られる体格こそ伸びたものの、体力の減少は憂慮されるーーーー」という報道が聞かれ始めて久しい。テレビゲームなどの普及や塾通いなど、子どもたちの生活パターンは昔と大きな違いが生じたことに加えて、少子化や遊び場の減少、保護者が子どもたちの遊べる環境に不安があること、子どもたちの運動不足を助長させていることに疑いの余地はなさそうです。発育期の運動の必要性は、だれでも理解できることだし、学校の授業だけではなく外でも大いに身体を動かして欲しいと思っています。では、子どもの期間、すなわち発育期にどうして運動や身体活動が必要なのかというと、その科学的根拠についてはあまり報告がないのが現状です。子どもは、風の子、元気な子、遅くまで汗を流しながら遊ぶのは子どもの特権・本性と言ってしまえばそれまでですが、そこに学際的な研究を加えることもその方面の関係者にとっては必要なものです。

そのような中で、日本学術会議の健康・生活科学委員会、健康・スポーツ科学分科会による「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」が２００８（平成20）年８月28日付けで国の関係省庁に提言がなされました。私もその策定委員会の一人ですが、この件に関しては世の中に強くアピールせずにはいられません。

先ず、日本学術会議とはどのようなものなのか簡単に述べましょう。昭和24年に設立され、科学が文化国家の基礎であることの確信の下でわが国の科学者の代表機関として内閣総理大臣の所轄として設置された機関です。平成17年に新体制になってから２、３００名ほどの会員で組織されています。主な職務は政府に対する政策提言を専門的かつ信頼性を持って行うことであり、その提言などは国の施策に効果的に反映されることになっています。

さて、ここに一つのデータがあります。５分間でどのくらいの距離を走れるかについて、１９８６年と２００５年の７歳から19歳までの男子の結果です。５分間走は持久性能力も表していますが、いずれの年齢でも20年前の子どもたちでは長い距離を走っていますし、個々の四角い印に付いているバーは標準偏差を示しており、体力水準の個人差が大きくなっていることが分かります。平均値の低下を合わせて考えると低体力の子どもたちが増加していることが分かります。また、一日の運動時間が極端に少なくなっており、握力、ボール投げ、上体おこしなども低くなっているというのです。一方では、部活をする子どもたちの運動時間は増えていて、小中学校において運動をする子としない子の二極化も認められています。肥満傾向の子どもたちも多くなりました。また、継続的に運動を取り組んでいる学校の生徒の体力は伸びているし、学力にもプラスの影響があると報告されています。私たちが数年前に報告しましたが、動物実験においても若い時の運動が血液中諸物質、筋肉の機能、心血管機能から大変よい方向にあることが分かっています。



５分間走の成績（平均値と標準偏差）における
1986年と2005年の比較（内藤,2008）

そこで、この提言には、⑴研究団体や行政に対して、子どもを元気にする運動指針の策定、⑵この運動指針策定の根拠となる事実関係の調査、⑶運動を指導できる質の高い指導者養成、⑷子どもをとりまく大人の理解を深め、運動やスポーツの科学的教育の充実、などの内容が含まれています。

子ども、特に乳幼児期の子どもに、最も大きな影響を与えるのは親たちであり、子どもの周囲にいる大人たちであり、長期的視野に立ち将来親になる世代への一般的な教育、健康教育、学校教育、地域を含めた充実した活動が必要になります。子どもたちを元気にする、元気にならなければ、明日の日本の将来はないと、とまで言えそうです。

最近、私がその一部分を担当し専門分野の学会などで発表したことを「弘学時報」の一面を借りて述べさせて頂きました。

本多庸一とキリスト教 ⑫

学校法人弘前学院
理事長・学院長
阿保　邦弘

２ 弘前教会と本多の伝道活動

伝道開始

本多は弘前に着任早々から、イングとともにキリスト教伝道に没頭し始めた。毎日曜日午前イングは自宅で生徒のために英語の聖書の講義を開き（バイブル・クラス）、午後は本多が義塾講堂で説教をするのであった。無論最初は塾生がほとんどであったが、次第に市民の参加者が増えるにしたがって、キリスト教への偏見や反対が表面化してきた。本多は塾長として強制的に生徒を集め、講堂でヤソの説教をするとは何事か、これでは子弟を義塾に託すことは出来ないというものが多く、塾生の中からも反対が起こってきた。そこで、菊池は教会と学校の分離をはかり、東長町の自宅を提供して本多夫妻を住ませ、これを仮教会堂とした。

本多とイングの熱烈な伝道はかなり急速にその感化を及ぼし、明治八年六月六日義塾生十四人がイングから洗礼を受けた。本多の弘前伝道の最初のみのりであった。洗礼を受けたのは、菊池軍之助、川村敬三、本多斎（庸一の次弟）、田中五郎、芹川得一、清野太一、本多武雄（庸一の三弟）、蒲田昌雄、今則雄、木村勇次郎、佐藤清明、佐藤二郎、西舘真澄、伊藤春山の十四人であった。本多は、このときの感激を「青森県管内陸奥国津軽群弘前に於いて、初めて天父に帰して、往罪を悔ひ、聖霊の感動に由て、教主耶蘇基督の贖罪を信じ、亜米利加合衆国メソジスト公会より派出せる伝道者ジョン・イング氏に由て、父子聖霊の名に頼りて洗礼を成す」としている。七月三日には工藤儀助、山鹿元次郎ほか六名が受洗した。

弘前公会から メソジスト教会へ

こうして教会がようやく形成されてきたので、正式に教会組織の必要が感じられてきた。そこで、本多は横浜公会に対し関係文書を発した。本多はたてまえ上、正式には依然として横浜公会に所属していたから、それからの分離独立という形で弘前公会を設立する了解を求めたのであろう。横浜公会は弘前公会設立を許可し、長老を派遣して祝辞を伝えている。明治八年十月二日、イング宅に集まり、本多庸一、川村敬三を長老に菊池軍之助を幹事に挙げてここに弘前日本基督公会が正式に設立されたのである。

弘前公会は、横浜公会にならってこれから分離独立したものであったから、元来超教派主義であった。しかし明治九年頃になると横浜、東京方面でようやく教派問題が起こり、弘前もその去就を決定しなければならなくなった。ブラウン・バラにつながる本多の線から行けば一致教会に縁故があったが結局はメソジスト協会に所属することになった。弘前教会が横浜公会を離脱して一致教会に加わらず、メソジスト教会に移ったことについては、多少とも気まずいトラブルがあったもののようで、バラは本多に不満を表明した書簡を送ったという。これに対し、本多が明治十年一月にバラに送った釈明の書簡の下書きが残っており、本多の苦心の胸中がよく察せられるところである。しかし、実際のところ、信徒たちは教派問題に対して関心が薄く、この決定も初期の教会や伝道の実態に即して見れば、イングの人物に対する傾倒によるものであったと考えるのが自然であろう。

本多のヤソならば

さて、このようにして弘前教会はそのあゆみを始め、その限りにおいてキリスト教は一応弘前に定着の基礎が出来たように見える。しかし、それは決して容易な道ではなかった。津軽の藩校が如何に比較的早くから開明的に洋学を取り入れた伝統があるとはいえ、つい二、三年ほど前まで禁制であったキリスト教がこの時期にこの僻北の地で一般に受け入れられるのは、至難の業であった。今日、弘前においてキリスト教関係者が異口同音に証言する「神話」がある。それは当時この未知なるものキリスト教に対する偏見不安にもかかわらず、「なんだか知らぬが本多のヤソならば本物だろう」という一つの信頼が求道者をひきつけ、また一般のキリスト教に対する寛容を促し、入信をめぐるトラブルを緩和したというのである。およそ一つの信仰が伝播されるもっとも普遍的な様式は、信仰者（伝道者）の具体的人格の感化という直接の契機を媒介としている。本多を知るすべての人びとは、一致して彼に「慈父の如き温情」を感じ、彼と語って「重荷を下ろすような心地がしていつも慰安を覚え」ている。「言葉を持って人を動かさず、理を持って人を圧せず、ただ太き太き精神をもて」人を動かした。このように彼の人格は、開拓伝道における当該の条件を満たすに最も適した資質の一つではなかったろうか。

第二に、彼には「先生は代々御用人の家柄であった。それゆえ当時の青年は、そんな関係からも先生を尊敬していた。」という立場があった。明治の初年である。質朴な東北である。本多が弘前では、その出自においても才能においてもエリートであったことは、重要なファクターであったに違いない。そして最後に彼の使命感に燃えた誠実な熱意があった。このように見てくると「本多のヤソならば」という「神話」は伝承された史実の重みにたえうるものであるまいか。

（以下次号）

青森県高等教育機関懇談会・青森県学校教育関係者合同懇談会報告

9月1日（火）に本学礼拝堂において第16回青森県高等教育機関懇談会および第10回青森県学校教育関係者合同懇談会が開催された。

当懇談会は青森県に所在する大学、短期大学、高等専門学校及び大学校等の所属長から構成されており、教育・学術・学校教育に関する情報交換を通じて各機関の連携を図り、高等教育機関及び地域の活性化に寄与すること、青森県学校教育の発展に資することを目的として毎年開催されているものである。

今年度は高等教育機関懇談会に16機関27名、学校教育関係者合同懇談会に21機関32名が出席し、本学が当番校として会場の準備及び議事進行を務めた。各機関より提案された「地域に根差した高等教育機関について」「青森県基本計画『未来への挑戦』〝教育、人づくり分野〟への各団体の関わりと連携の在り方について」等の協議事項について、本学の吉岡学長が座長となり、事例報告や意見交換が行われた。

この懇談会を通して各機関での現状や特色ある取組、将来構想計画や課題などについて積極的な意見交換がなされたが、同一課題に対して意見交換及び構想計画を練ることによって、将来的に各教育機関の大きな発展の礎になるものである。

最後に次回の懇談会開催に向けた参加機関の見直しについて意見が出され、次回の当番校である青森中央学院大学での開催を確認し、懇談会のさらなる充実、発展継続を期待して閉会された。

談話室

プロ野球を憂慮する

文学部英語・英米文学科　准教授　渡邉　教一

元々プロ野球のテレビ観戦こそ特に趣味のない私には唯一の楽しみであり、他方、未熟な高校野球にはさほど興味がなかった。ところが、何とはなしに今夏の高校野球甲子園大会の試合の模様をテレビ観戦していたのだが、その時、私ははからずもなぜプロ野球よりもはるかに技術が劣る高校野球にかくも日本の国民が熱狂するのかが改めてはっきりと分かった気がした。つまり、それは高校野球選手達の野球への一直線のひたむきさが見る者を釘付けにし、感動させるということだ。高校野球の投手はたとえこれでもかと痛打され、敗北が決定的といえども決してあきらめることなく必死の眼なざしで最後まで投げ抜く姿は崇高でさえある。そして、高校球児は平凡なゴロやフライを打ったとしても必死に一塁めがけて全速力で走り抜けようと努める。

一方、そのようなつい胸が熱くなる高校野球を見た後、日本のプロ野球の試合の模様を見てつくづくと感じたのは正にそれは気の抜けたビールのようなものであった。すなわち、それは決してあきらめないひたむきな真剣さと身ぶるいするほどの緊張感を全くと言っていいほど欠いていた。プロ野球選手は平凡なフライやゴロを打つともはや真剣に全速力で一塁めがけて駆け抜けようとはしない。なおも言わせてもらえば、プロ野球の試合を根本的に見る者をして最もつまらなくしている原因は、一人の投手が最後の最後までよろめきながらも必死の形相で力投を続ける気高い姿がほとんど見られないことである。これは真に寂しい限りである。

言うまでもなく、確かに、プロ選手ならではの豪快なホームラン、華麗なるファインプレーは我々ファンを魅了してやまない。だが、そのことだけに安住し、満足するのではなく、たとえプロ野球選手といえども一度は高校野球の根底にある基本に忠実なプレー、しかも一直線にひたむきなプレーに徹するという原点をみつめ直してみるべきではなかろうか。さもなければ、いくらファン人気回復策と称する制度改革を立ち上げようとも、むしろ逆にそれがファンを白けさせる一因になりかねない。

第2回 ヒロガク福祉創造フォーラム

愛　地域（まち）へ

―ソーシャルワーカーとは―

実行委員長　福士　千紘（社会福祉学部2年）

▽**目　的**

本フォーラムでは、福祉が抱える課題を適切にとらえ、地域社会の福祉向上の担い手として、どのようなソーシャルワーカーが求められるかについて考えます。

▽**と　き**　十一月八日（日）午前九時三十分～午後四時二十分

▽**ところ**　弘前学院大学

▽**内　容**

シンポジウム「どんなソーシャルワーカーが求められているのか」／ワークショップⅠ（現場の人といっしょに）社会福祉の古典・名著を読む～リッチモンドを読む～／卒業生の実践報告「児童養護施設の専門性とは」／ワークショップⅡ「学生の実習・ボランティア・生活体験等からソーシャルワーカー像を探る」／施設販売など

▽**参加料**　無料

▽**問い合わせ先**　弘前学院大学社会福祉教育研究所

（TEL０１７２―３４―５３１１）

メールアドレス

kenkyuusyo@hirogaku-u.ac.jp

研究紹介⑦

地理学は「文系」？

社会福祉学部　准教授　北村　繁

教員養成の地理学関連科目を担当しているため、「社会科」のイメージが強いのでしょう。研究室に初めて来た学生さんが、怪訝そうに『『理科』の先生でしたっけ？』と、私に尋ねることがあります。

私の専門は、「火山灰編年学（テフロクロノロジー）」です。やっぱり「理科」っぽい名前でしょうか。なにをする学問かというと、強いて一言でいえば「火山灰の図鑑をつくる」というところでしょう。昆虫を見つけたときに、それが何という虫で、害虫なのか、毒はあるのか、などということを昆虫図鑑で調べたくなるように、地層中に火山灰を見つけたときにも、それが何という火山灰で、どんな性質をもっていて、いつの時代の噴火のものかがわかると、いろいろ便利なことがあります。

たとえば、地震予知。ひとたび活動すれば大きな地震を引き起こしかねない「活断層」が、既知の「火山灰」を切ってずらしていると、「活断層」の過去の地震活動のペースを見積もれます。たとえば、千年前の火山灰層が一メートルずれていれば、しばしば地震を引き起こしている活発な「要注意」活断層、十万年前の火山灰層が全然ずれていなければ、結構「おとなしい」活断層かもしれません。

私自身の研究では、今一番関係が深いのは考古学。中米・エルサルバドルでは、5世紀頃の大噴火で、いったん当地の文明が衰退し、メキシコ高原の勢力に征服されたと考えられてきましたが、もし、この噴火の火山灰より下の地層から、メキシコ高原の勢力に由来する遺物が見つかったら、噴火が起こったときには、すでに、メキシコ高原の影響が及んでいたということになるでしょう。

このように様々な方面で利用される「火山灰編年学」ですが、日本では、こうした研究が、「地理学者」によって進められてきました。工学部出身の新首相のおかげで、「理系」・「文系」という言葉が一時はやりましたが、「地理学」は、「文系」と「理系」をまたにかけた、広範な領域を扱う学問です。

他のあらゆる分野との境界領域にフロンティアを広げ続ける「地理学者」の一人としては、「理系」「文系」などといった狭量な枠組みにとらわれず、問題解決にまっすぐ向かっていくような次世代の人材を育成していきたいと、常々考える次第です。

父母と教職員の会講演会報告

平成二十一年度父母と教職員の会講演会が、八月二十九日の土曜日、礼拝堂において開催された。例年、夏に行われていたパソコン研修会にかわり企画されたもので、学内外五十名の出席者があった。

講師には、本学客員教授で、豊橋創造大学教授後藤勝正先生をお招きした。後藤先生は骨格筋の生理学やスポーツ医学などの健康科学の分野を研究されており、「老化は止められるか？～からだを上手に使ってみよう～」というテーマで、「老化」とは高齢化に伴う身体能力の退行性変化のことを示しているという説明があり、プロジェクターを用いて、実際の県別の老人データ等を見ながら、わかり易く進められた。

講演の内容は、身体を動かさないと老化が加速して、死の確立の危険性が増大し、さらに、身体能力低下が交通事故につながっていくが、身体を上手に動かすことで老化の進行を抑制することも可能である。

そして、老化は年齢を重ねるということと異なるもので、筋力・神経伝達速度・肺活量・病気に対する抵抗力・体温調整機能の低下から、骨粗鬆症や緑内障といった様々な病気に結びつき身体に影響してくるものであり、老化に立ち向かうためには、老化の原因を自己覚知し、薬に頼るのではなく日々の軽い運動を心掛けることが老化を防ぐことに繋がっていくということであり、「老化防止＝健康」を意識することが最も効果的に予防できるとのことであった。

講演者　後藤勝正氏

お知らせ

◆**クリスマス礼拝**◆

12月10日（木）　16時より

◆**クリスマス音楽のタベ**◆

18時30分より

場所：弘前学院大学　礼拝堂

どなたでもご自由に参加できます。

尚、音楽会については、整理券を配布（12月）しております。本学まで問い合わせ下さい。

看護総合臨床実習報告

小児看護領域における看護総合臨床実習

看護学部講師　齋藤美紀子

看護学部の看護総合臨床実習（総合実習）は、今年二年目を迎えた。総合実習は、学生自らが目標を設定して実習内容を組み立てていくという主体性が問われる実習である。そのため、実習に入るまでに事前学習や頻回の担当教員との面談など多くの準備を必要とする。

今年度、小児看護領域では、「地域における子育て支援」と「重症心身障害児と家族への看護」をテーマに実習を行った。「地域における子育て支援」では、今はまだ先駆的な活動である病児保育を行っている小児科クリニック併設の病児保育室と、地域子育て支援センターを設置している保育園で実習を行った。また、「重症心身障害児と家族への看護」では、重症心身障害者病棟を持つ病院で実習を展開した。各施設二から三名という少人数で、最大限現場に即した実習を展開することもねらいであったことから、教員は後方からのサポートに徹した。心配しながらも学生の持つ力を信じて見守っていたが、程なく学生はスタッフの一員として行動し、最後の頃には見違えるような姿を見せてくれた。最終日の実習のまとめでは各々の学びの成果が発表されたが、その深い内容に全員が感涙という場面もあり、指導者としても学生の成長ぶりに胸が一杯になった。

あと半年で社会に巣立つ学生にとって、今回の実習での経験は得がたいものになったようである。また、実習施設からは、学生が行った支援や地域貢献についてよい評価をいただいた。実習を通じて教育と臨床・地域がつながっていけることは素晴らしい。この実習を領域の特色として大事に育てて行きたいと感じた次第である。

地域子育て支援センターでの実習で学んだこと

看護学部四年　小松　由衣
関　照美
松井　史織

私たちは、七月三十一日から七月三十日の看護総合臨床実習において、地域における子育て支援活動について、幅広い視野から理解しその活動の実際を学ぶことをテーマに、みどり保育園の地域子育て支援センターで実習を行いました。

地域子育て支援センターの活動の一つとして、子育てサークルの運営支援があります。みどり保育園では、毎日、様々な子育てサークルが活動していました。実習では実際にそれらのサークルに参加し、お母さんたちや子どもたちと交流しながら、親子の関わりを実際に見たり、普段の子育てや、どのような理由で子育て支援センターを利用しているのかなど、様々な話を聞きました。また、実習二週目にはサークルのお母さんを対象に夏場の水分補給とスキンケアについて健康教育を行いました。さらに、移動おもちゃ館という事業に同行して地域での活動にも参加しました。

子育てサークルに参加することによって、自分が不安に思っていることが他の人も経験していたり、みんな同じ失敗をしていることを知り、お母さん方は気持ちが楽になって安心するようです。また、親子一緒に参加することで親子関係の育成につながり、子どもの社会性を伸ばす機会となります。今回の実習を通して、子育て支援活動にはこのような利点があることを学びました。

健康教育は合計三回実施しましたが、聞いている人も参加できる内容にした方が楽しく、発表側の私たちも反応があればやりやすいことが分かりました。実際に夏場のドリンクを作って試飲してもらうなど、お母さん方や保育園の先生方にも好評でとてもやりがいがありました。

今回の実習を通して、子育てサークル活動を支援し、母親が気軽に来られる雰囲気を作って、子どもと家で二人だけという密室の子育てがなくなるようにしていかなければならないと思いました。また、子どもの成長発達に関するサポートだけでなく、母親の精神的・身体的なサポートも重要です。看護師・保健師としても、子育て支援活動に積極的に関わっていくことが大切であると考えました。

弘前学院スクールハウス 譲渡記念礼拝

今年の7月18日に、弘前学院「百沢スクールハウス」内において同施設の譲渡記念礼拝が厳粛に行われました。同施設は1978年から弘前学院の生徒・学生のための修養の場として利用され親しまれてきました。

スクールハウスの前景

この礼拝では、中澤實郎宗教主任の司会により、讃美歌を高らかに歌い、石垣雅子聖愛高等学校宗教主任による聖書朗読と祈祷、阿保邦弘理事長の式辞、宗教主任による祝祷が行われ、午後には昼食会が催されました。

阿保理事長の式辞の中で、弘前学院スクールハウスについて惜別の思いを込めて次のようなお話しをされました。1959（昭和34）年8月4日に「浅虫スクールハウス」、1978年に「百沢スクールハウス」が建てられ、中学校・高等学校にあっては合宿修養の場としての「生活教室」と称して、短期大学・大学にあっては建学の精神と聖書の「こころ」を学び、友達づくりや親交を深める「リトリート」と称して、有意義に活用されてきました。クラス単位の「生活教室」から学年単位形式に変更されて同施設の必要性がなくなりました。今年に入り社会福祉施設として活用したいとの申し出を受けて譲渡することになり、永い歴史を綴じることになりました。

譲渡記念礼拝

この後の昼食会では、中澤宗教主任からスクールハウスの思い出が話され、工藤幸校友会長、中田悦子氏、花田佐値子氏、坪田庸子氏やその他ご出席された方々もそれぞれに思い出に浸りながら惜しみつつ、また本学教育のより良き場であったことへの感謝と祈りをもって、和やかにお別れの会を終了いたしました。

スクールハウスとしての建物はなくなりますが、建学の精神と聖書のこころを学ぶ修養、修練の場は時代と共に形を変えながらも、これからもこの学院に必要な場として継承されていくことでしょう。

スクールハウス右側、湧き水がある“めぐみの森”

伝統を引き継ぐ

文学部　英語・英米文学科　馬場　豊樹

わたしは八戸地方を代表する民族芸能で、国の重要無形民俗文化財に指定されている八戸えんぶり（毎年2月17日から20日まで）に小学校から現在まで参加しています。

えんぶりとは、その年の豊作を祈願するための舞で、太夫と呼ばれる舞手が馬の頭を象った華やかな烏帽子を被り、頭を大きく降る独特の舞が大きな特徴です。その舞は、稲作の一連の動作である、種まきや田植えなどの動作を表現したものです。えんぶりを舞うことを「えんぶり摺り」「えんぶりを摺る」と言います。「えんぶり」という言葉は動詞の「イブリ（揺り）」に通じ、大地を揺さぶる、揺さぶり起こす、かき混ぜる、などの意味が込められています。その時、太夫の烏帽子には神が降臨すると信じられています。

右から２人目が馬場くん

えんぶり摺りの合間の子供達による「松の舞」「えんこえんこ」「喜び舞い」「えびす舞」「大黒舞」などの祝福芸も、観客を楽しませてくれます。えんぶり摺りの一連の流れは、各組によって異なりますが、主に太夫による「摺りはじめ」「中の摺り」「摺り納め」の合間に、祝福芸が行われます。最後に、田んぼの畦から水が漏れないようにするために、「畦留め」をして、えんぶりの演目は一通り終わります。

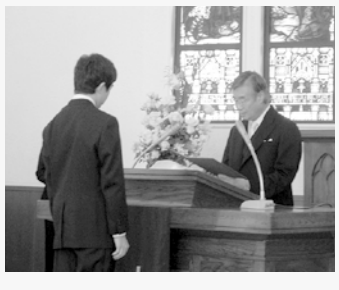
私は、八戸市是川地区にある妻ノ神えんぶり組に所属しています。小学生、中学生の時は、主に「えびす舞」と言って、釣竿を持ったえびすが鯛釣る舞をやっていましたが、現在では、太夫の一員として役割を担っています。また、自分の演技だけではなく、同時に、下級生に対して演技の指導も行っています。昔から代々受け継がれてきた伝統芸能を子供たちに責任を持って伝承していくために、独特の唄のなまりや言い回し、踊り方などを習得していく必要があると感じています。八戸の伝統芸能の担い手として活動していることに誇りを持ち、今まで受け継がれてきた伝統を絶やさないように努めていきたいです。今後の夢は、県内だけでなく、世界の人々にも八戸地方に伝わる伝統芸能「八戸えんぶり」を知ってもらうために活動していくことです。

平成二十一年度 九月期学位記授与式挙行

平成二十一年度九月期の学位記授与式が去る九月二十九日（火）午後三時三十分より本学礼拝堂において挙行されました。今年度は文学部英語・英米文学科1名の卒業でした。

卒業生の晴れの門出を祝うかのように、曇り空がさわやかに晴れ、関係学部教職員の臨席のもと、厳粛に執り行われました。式は、佐藤和博英語・英米文学科長の司会により、パイプオルガンの演奏と讃美歌合唱に始まり、中澤實郎宗教主任の聖書朗読、祈祷の後、吉岡利忠学長より卒業証書が授与されました。出席者を代表して吉岡学長より卒業生にお祝いと励ましの言葉が述べられ、印象深く、和やかな式となりました。

式終了後には、卒業生に花束が贈呈され、出席者全員で卒業生の新たな旅立ちをお祝いしました。



クラブ紹介①

文芸誌編集部

文学部　日本語・日本文学科3年　安田有美香

こんにちは、弘前学院大学文芸誌編集部です。文芸誌編集部と聞いて何をするサークルか思いつかない方もいると思います。でも堅苦しく考える必要はありません。私達のサークルは文章を書くのが好きな人、または頭の中のイメージを文に起こしてみたいという人たちの集まりです。現在、そのようにして集った部員が約25人います。

主な活動内容としては月に一度の部誌の発行や学祭の時に班に分かれての作品作りです。学祭の時には班によってお題やリレー小説といった普段やれないものをやっています。これらは全て無料で配布しています。また、これらを制作する際には部員達が一から始めます。

まず最初の作業として集まった部員達が考えたオリジナル物語や詩、ゲストとして部外から投稿された作品を皆で読み、誤字・脱字や表現がおかしな部分を指摘しあって修正します。ゲストの方の物はそのまま出されたり、部員によって誤字・脱字を修正しています。その次に手直しのされた作品の内容によって部員が判断して順番を決めたり、それに沿った目次作りになります。ページが一通り揃った後はそれを原本の形になるように揃えていきます。そしてノンブルを張り付けてから下準備が完成します。最後にコピーしたものを本の形に綴じていきます。

この流れを部員全体で協力していきます。部員全員が学年問わず仲が良いため、作業中は和気あいあいしています。一見文章書きと聞いて暗いイメージを感じるとは思いますが、それとは全く逆のサークルでもあります。

文芸誌編集部はこのように、ただ単に作品を書くだけという個人個人のサークルではなく、皆で批評しながら文章力を高め、また出版・編集作業を身近に感じられるサークルです。

クラブ紹介②

桜色鉄人バレーボールサークル

文学部　英語・英米文学科2年　松澤　将樹

春には多くのヒロガク桜が咲く。正門から本館までの桜アーチの中を、学生がてくてく歩いている四月の光景は、新入生にとって最初の大学チックの訪れではないだろうか。

私はその道中を蔭から見つめ、アスリート系学生を見つけてはニタニタしている。噂によれば今年の新入生には１８０㎝オーバーのミスター猛者バレーがいるらしい。わたしは昨年の五月からバレー同好会に参加した。何人かの学生が木曜日の午後に気持ちのいい汗をかいていた。夏になる頃には学生の数は時に20人を超え、ちらほらとバレー猛者も現れた。バレー同好会には2球のボロボロボールしかなく、バレー道具も満足のいくものではなかったが、20人を超える学生がぼろボールを大切にし、多くの時間を笑いと運動の空間で満たしていたことに私は惚れ惚れした。それは4月のヒロガク桜のように大学チックで美しかった。今年から大学の協力もあり、バレーサークルとして活動している。10月1日にバレー部室も借りることができた。徐々に環境を整え、ヒロガクバレーに加わりたい学生が気持ちよく活動できるような土台作りをしよう考えている。これからもヒロガクバレーサークルが続き、みんなに愛されるサークルとして活動をしていくことを心から願っている。

（弘学初代Bクイック右の松澤）

留学体験談

異文化を通して学んだこと

文学部　英語・英米文学科3年　大溝由加理

私はもともと異文化に興味があり、留学することはずっと夢でした。今回、幸運なことに先生方や両親の協力のもと無事にアメリカ、ウィスコンシン州にあるラクロス大学に一学期間留学することができました。学校生活はとても充実したものとなりました。初めての寮での生活。困ったときはいつでもルームメイトが助けてくれました。クラスはリスニング、スピーキング、ライティング、グラマーを学びました。授業は教科書通りに進むだけではなく先生方の工夫が凝らされており決して飽きのこないもので、英語教師をめざしている私にとってはこの先生方の授業に参加できただけでも得るものは大きかったように思えました。

留学を通し私はたくさんの発見をしました。アメリカではコメディー番組が比較的に多いことや、テレビCMでは他社の商品の名前を堂々と公表し自社の商品と比べたりと日本ではありえない宣伝内容に本当に驚かされました。また街を歩いていると知らない人に挨拶をされたり異文化を身をもって体験することができました。

そして掛替えのない出会いもありました。もし留学しなかったら決して出会うことができなかった、であろう人々に出会い、一緒に遊びに行ったり、夜中まで語り明かしたり、たくさん笑いあったりしました。時には異文化の壁に衝突しお互いのことを誤解したりもしました。ただその衝突があったからこそお互いのことを深く知りあうきっかけになったのかもしれません。

日本を離れ、アメリカという国から自分の国を改めて見てみると、日本語をしゃべれるということ、日本食を食べられるということ、時差もなく家族に連絡をとれるということ、あまりにも慣れすぎて気付かなかったのですが実は当り前ではなかったということに気付かされました。今回の留学を通して外国人としてアメリカを見つめ、アメリカから日本を見つめ、得る事ができたものは今後の私の人生の中で一生の財産となることでしょう。

文学散歩

太宰治の人間らしさ

文学部　日本語・日本文学科2年　赤石　麻美

今年度の文学散歩は、ちょうど生誕１００年という太宰治をテーマにしたものでした。県内では様々な太宰治に関する催し物が企画されていましたが、文学散歩では青森市にある青森県立美術館と青森県近代文学館を訪ねました。

県立美術館では「太宰治と美術」を主題に、文学作品ではない分野から太宰治を紹介していました。太宰治の学生時代のノートには、英語の走り書きや、何気なく書いたと思われる自画像がいくつも描かれていました。それらの自画像には、後の文学作品からもわかる自身への関心の強さが表れていたと思います。また、それまで私は知りませんでしたが太宰治は美術にも長けていて、油絵や太宰治がデザインした同人誌の表紙などがありました。それらは素人の私から見ると少し陰湿なもののように感じましたが、主張がはっきりと表されていると思います。展示の後半では写真が紹介されていて、子どもの頃に兄弟と撮ったものから、晩年のものまで見ることが出来ました。有名な、机に肘をついてポーズをとる太宰治の写真は少しナルシストにも見えますが、あれはまだ若い頃に友人とふざけて撮ったものので、お茶目な面もあるのだなと思いました。

三内丸山遺跡の広場での昼食をはさんで行った近代文学館は、県立図書館の2階にあり誰でも無料で入館することが出来ます。太宰治を取り扱った企画展示室では、文学作品の原稿や初版本を中心に展示していました。展示作品について学芸員の方が一通り説明をしてくれましたが、その中でも私は太宰作品の「女生徒」の基となったノートが最も興味深かったです。そのノートは開かれて置いたページしか見ることは出来ませんでしたが、細かく書き込まれた日記からは筆者の有明淑の思考の深さを感じ取りました。尊敬する太宰治に自身の日記を採用してもらうことは、とても大きな感激だったと思います。また、芥川賞の選考について川端康成に宛てて書いた手紙は、漢字や言い回しが難しくもあり部分的にしか読解できませんでしたが、太宰治の有名なエピソードとして見ることが出来て良かったです。

これまで私は太宰治の人物像について、作品からわかる印象しかなく、それはあまりいいものではありませんでした。しかし、今回見た様々な展示は作風からだけではわからない点の太宰治の人間らしさが表れていました。文学散歩に参加したことで新たな発見をすることが出来たと思います。

近代文学館にて、学芸員の説明をきく

卒業生からのメッセージ

社会のための大学生活

2009年3月　看護学部看護学科卒　大谷　未希

私は、弘前学院大学を卒業し、弘前大学医学部附属病院で看護師として働いています。働き始めて半年、やっと職場の雰囲気にも慣れ、仕事のペースを掴みつつあります。入職したばかりの頃は、目の前にある仕事をただこなすばかりでした。しかし今は、患者にとって最も良い看護とは何かを日々考えて行動することができています。

私は学生の頃、学祭実行委員会に所属していました。学生の皆に、地域の皆に、楽しんでもらうためにはどうすればよいかを、仲間とともに考えていました。他人のために何ができるかを考えるということは、看護師になっても変わらず、学生の頃に熱心に他人のためを思って考えた経験を活かし、今は患者のことを熱心に考えることができています。

また、他人と話すことは簡単なことのように思えますが、実はそうではありません。患者はほとんどが年上であり、先輩方も年上です。学生までの人生では、友人や先輩等同年代の人と話す機会が最も多いと思います。しかし職場では、同年代から大先輩までの人が全ているのです。新人として、年下としてどう関わるか等、関わりの難しさを感じています。

学生の頃は、同年代の人との関わりが最も多いのですが、サークルやバイトを通して、たくさんの人と接することができます。私は飲食店でバイトをしていたことがあり、お客様は年上の人ばかりでした。そこで年上の人への言葉遣いや態度を学ぶことができました。今では、その頃の経験が日常的に活かされ、バイトをしていて本当に良かったと思っています。

大学生活は、講義や実習以外でも本当にたくさんのことを学ぶことができます。その学びが、社会にでてから活かされるということを実感できると思います。社会にでてから、大学生活のすばらしさを実感するためだけでなく、大学生活そのものを充実したものにするためにも、たくさんのことにチャレンジし、様々な経験をしてほしいと思います。